

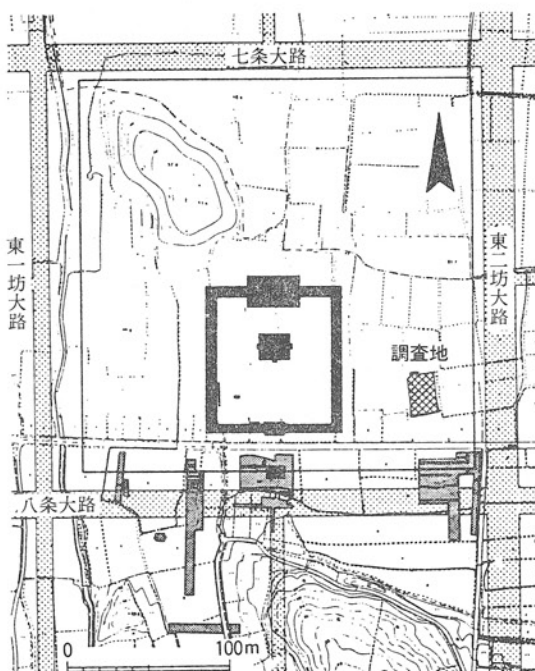
奈良・紀寺跡

- 1 所在地 奈良県高市郡明日香村大字小山
 - 2 調査期間 一九八七年(昭62)八月～九月
 - 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
 - 4 調査担当者 代表 牛川喜幸
 - 5 遺跡の種類 寺院跡
 - 6 遺跡の年代 七世紀後半～八世紀初頭
 - 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
- 紀寺跡は藤原京左京八条二坊にあり、平城京の紀寺の前身寺院と考えられている。一九七四年に発掘調査が行われ、南門・中門・金堂・講堂が南北に並び、中門から出た回廊が講堂に取り付く伽藍配置と、南門に取り付く南面大垣等が確認された。塔は中軸線上にも、金堂西南部にも検出されず、未調査の東南部に想定される。

紀寺の造営・廃絶の時期



(吉野山)

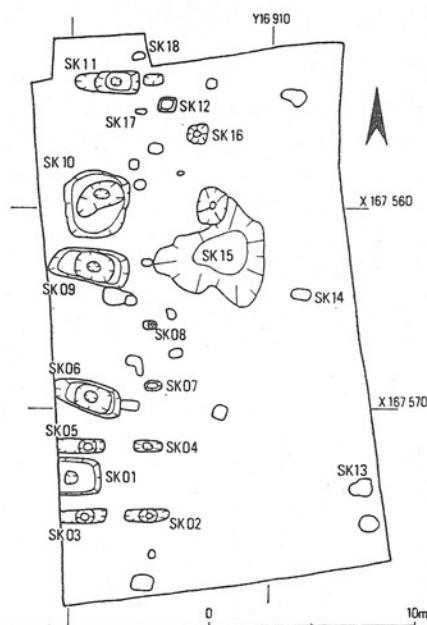


紀寺跡伽藍配置図

はあまり明瞭ではないが、軒瓦等から金堂等の中心伽藍は七世紀後半代に、南門や大垣は藤原宮の造営と並行して整備されたと考えられ、金堂跡に瓦窯の作られる奈良時代末～平安時代初めには廃絶していたとみられている。

今回の一九八七―一次調査は、寺域東南部で水田改良工事の事前調査として行ったもので、調査地は南北二六m、東西一五m、面積は三九〇㎡である。

検出した主な遺構は、大小一六基の土壇である。これらの土壇は東西方向の溝状を呈するものが多く、調査地の西寄りに南北に並ぶ。



1987-1 次調査遺構略図

形態や埋土の状況、遺物の種類はほぼ同じである。一例を示すと、SK 一は東西二・二m、南北一・一m、深さ一・四mで、中央部は円形でやや深い。埋土は、上層は木炭・瓦・土器・焼土を含む暗褐色粘土であり、中層は銅滓・木炭を含む短期間に埋められた層、下層は砂・葉を含む青灰色粘土である。多くの土壙から炉床・フイゴ羽口・埴埴・湯口・バリの屑が出土した。SK 一〇には漆の容器として使用された大量の壺類が一括投棄されていた。また僅かながら金箔が出土した。

これらの土壙は紀寺造営終了時に、鋳銅工・漆工・箔工等が作業していた工房の廃止に伴い、不用物を投棄したものとみられ、それは藤原京の造営に伴う寺域内外の整備とも関連するであろう。

木簡は銅滓層下の木製品・木片・自然木・葉を含む層と、銅滓層上の粘土層から一四点出土した。ほとんどが断片か削屑で、人名とみられるものが二点ある他は意味の取れるものが少ない。

8 木簡の釈文・内容

(1) 下毛野人□ 091

(2) 〔下カ〕 118×25×3 033

(3) ・×□可三万呂 (108)×28×2 081
・×〔目カ〕

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報一八』(一九八八年)

(加藤 優)